

國學院大學学術情報リポジトリ

縄文時代後期のクマ表現：青森県を中心として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 元康 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001961

縄文時代後期のクマ表現 —青森県を中心として—

加藤 元 康

要旨

縄文時代後期は、それ以前の時期に比べて、第二の道具の多様化が認められ、東北地方北部では、それらの中にクマを表現した遺物が特徴的に出土している。そこで、モノと心との関係を考慮しながら、クマが表現されたと考えられる遺物を、縄文人の視線とその表現姿勢に着目し、検討を行なった。表現されている姿勢を伏せ像と立像に分類し、伏せ像の系譜は狩猟文土器に認められるとして、伏せ像から立像・伏せ像の両立へと時期的に多様化することを指摘した。また、人のクマへの意識は世界的にみても高く、クマの伏せる姿はクマ送りやクマの皮はぎなどの民俗事例と比較して、祭祀における姿勢と考えられる。そのことから、表現されるクマの姿勢の変化は、祭祀の多様化と考えられるとして、その変化の要因を祭祀の場の移動に求めた。

キーワード

縄文時代、クマ、表現、視点、姿勢、狩猟文土器、祭祀、場の重要性

1. はじめに

國學院大學伝統文化リサーチセンターの研究プロジェクト「祭祀遺跡に見るモノと心」では、東北地方北部を研究対象地域の一つに設定し、歴史的脈絡を考慮し、総合的に理解しようとするクロス＝コンテクスチュアル分析やランドスケープ研究を行ない、祭祀考古学の方法論・分析方法の確立を目指している。小林達雄が定義した、その形態に具体的な機能や用途を解明する特徴を全く見出せない、第二の道具を詳細に観察するなどの研究活動を行なっている。

東北地方北部の縄文時代後期の第二の道具には、土偶などの以前からあったものに、冠状土製品・三角柱状土製品・鐸形土製品・靴形土製品・スタンプ形土製品・三角形石製品・クマ形土製品などが加わり、狩猟文土器や青森県小牧野遺跡・青森県太師森遺跡・秋田県大湯環状列石・秋田県伊勢堂岱遺跡などの環状列石も見られる。縄文時代中期とは異なり、より一層、第二の道具や祭祀遺物の多様化が窺われ、縄文時代の祭祀の変革期の可能性が考えられる。

また、本地域の縄文時代後期には、クマを表現したと考えられる遺物の出土数の増加があり、先に挙げたクマ形土製品の他に、動物付石皿・クマ付き土器・動物形土製品内蔵土器が出土している。このような現象は、この時期の祭祀の特徴の一つと考えら

れる。そこで、本稿ではクマ表現がなされた遺物について、モノと心との関係性についても考慮しながら、検討してみたい。

モノと心との関係については、まだ十分に熟考しきれていないが、心から考古学の研究対象とする遺物(モノ)までの過程を考えると何らかの意識(心機)があり、または芽生えて、それをモノとして製作する技術を持ち、さらに、それを作ろうとする意思決定があると考えられる。またモノとして製作された後も、使用・廃棄まで同様に心との関係があると想定できる。これらに加えて、人間の生活に影響を及ぼす、社会・政治・経済・流通などの人間を囲む外的要因も関与している。これらを総合的に理解することで、モノと心との関係に迫れると考えている。

第二の道具の編年研究が進み、その次の段階に上る必要がある現状においては、技術的側面からの分析を得意とする考古学が、遺物を取り巻く精神世界を捉えることができるか難しいものの、このような考えを含めて検討する事が必要であると思われる。

以上の点を念頭に置いて、この地域における縄文時代後期のクマ表現の検討を行なう。また、現在、行なっている資料調査の関係から青森県を中心として検討を行なうことにする。

2. クマへの意識

クマは食肉目クマ科に属し、現在、日本列島にはエゾヒグマが北海道に、ニホンツキノワグマが本州島・四国・九州に生息しているが、九州では壊滅状態であるという（松井 2003）。古い段階では更新世中期にクマの化石が出土している（直良 1998）。

クマが表現されている遺物は縄文時代の早期からあり、その後は縄文時代中期・後期・晩期、続縄文時代、オホーツク文化期にみられる（宇田川 1989）。また古墳時代には熊形埴輪がある（志村 2002）。最近では、大陸とのつながりを考えることができる北海道の縄文時代早期の石刃鎌石器群に伴って出土したクマ形石製品を含む人・獣表現とロシアの極東地域のそれと比較し、その類似性を指摘した研究もある（伊藤 2006）。クマ表現の本源がどこにあるのかは重要であるが、縄文時代早期に出現し、その頃からクマを意識し、モノに表現していると考えられる。クマへの意識は伝説や民俗伝承などの部分でも語られていることから、モノに現れていなくとも存在し、クマをめぐる信仰はクマの生息地域の各所にあることから人類史的活動において、重要な位置にあるといえる。

しかし、クマへの意識はクマが生息する地域の人間活動の根底に存在し、縄文時代早期からクマを表現している遺物があるとはいえ、時期を詳細にみると、クマ表現がモノの系統として追えるかどうか疑問である。出土分布やその出土量も時期によって地域性や傾向がある。東北地方北部では縄文時代後期以降にクマ表現の遺物が増加する傾向にあり、共通文化圏を設定するものもある（女鹿 2000）。

このことから本稿では通史的な増減現象の把握や全体的な解釈よりも、増加現象を見せる縄文時代後期に焦点をあてて、その現象をどのように考えるのかを検討することで、モノと心との関係に迫ってみたい。

3. クマ表現の捉え方

動物などを表現したと思われる動物（昆虫）形土製品には、イヌ・オオカミ・ヘビ・イノシシ・サル・カメ・コノハズク・トリ・サル・カエル・ゲンゴロウ・カマキリなどがある（江坂 1960・大田区郷土館 2003）。これら以外にも動物種を想定できない動物形土製品が多くあり、本稿でクマ表現として扱って

いる遺物の中にも他の動物種を推定しているものがある。このような問題は古墳時代の熊形埴輪にもみられることから（志村 2002）、動物種の認定は動物表現に共通する問題の1つと言え、クマという動物を特定する条件も重視する必要がある。

原始絵画の研究では考古学の研究方法の開発の必要性が指摘され、コンテキストや描き方・タイミング・下絵の研究などが挙げられている（設楽 2006）。また、後述する狩猟文土器についても、描かれる動物文に比べて、弓矢文のサイズが大きく描かれていることから、矢の前に委縮する獣を想定するなど、絵画表現は表現者の認識や描いた対象物のデフォルメ、強調・大きさなどの問題がある（佐原 1993）。直良信夫も古代人はクマを明確に写実しないと述べている（直良 1998）。

現在は、動物の胴体・顔・その他の特徴などを総合的に判断して、動物を特定している。クマの場合は胴体の大きさ、顔の表現などをとらえて認定している。これらに加えて、表現されている動物の姿勢にも注目する必要がある。動物の骨格は一樣ではなく、オホーツク文化のクマ表現には座像があり（宇田川 1989）、その姿勢を取ることができるのは何の動物であるのかという視点も加味しなければならないと思われる。クマは人に例えられるほどに、行動的な要素に類似性があり、立つ・座するという姿勢の類似性以外にも、穴掘り、木登りなどができる。

これらを踏まえて、表現されていると思われる姿勢に注目するとともに、縄文人が描いた視点、見た目線を考慮して、遺物の詳細な観察を行ない検討する。

4. 縄文時代後期のクマ表現の遺物

青森県の縄文時代後期の動物表現の遺物の集成や動物形土製品の論文で、クマとされている遺物（福田 1998・金子 2004）や実際に観察してクマの可能性があると判断したものには、以下が挙げられる。

- ・ 三内丸山 (6) 遺跡 (第1図1・3～6)
土製品2点、クマ付き土器2点、動物付石皿1点
- ・ 小牧野遺跡 (第2図1・4)
動物付石皿1点、クマ形土製品1点
- ・ 水木沢遺跡 (第4図)
クマ形土製品1点
- ・ 古街道長根遺跡 (第5図)

壺形土器の口縁端部に付けられた動物1点

・ニツ石遺跡

香炉形土器の頂部のクマ頭形突起1点がある。

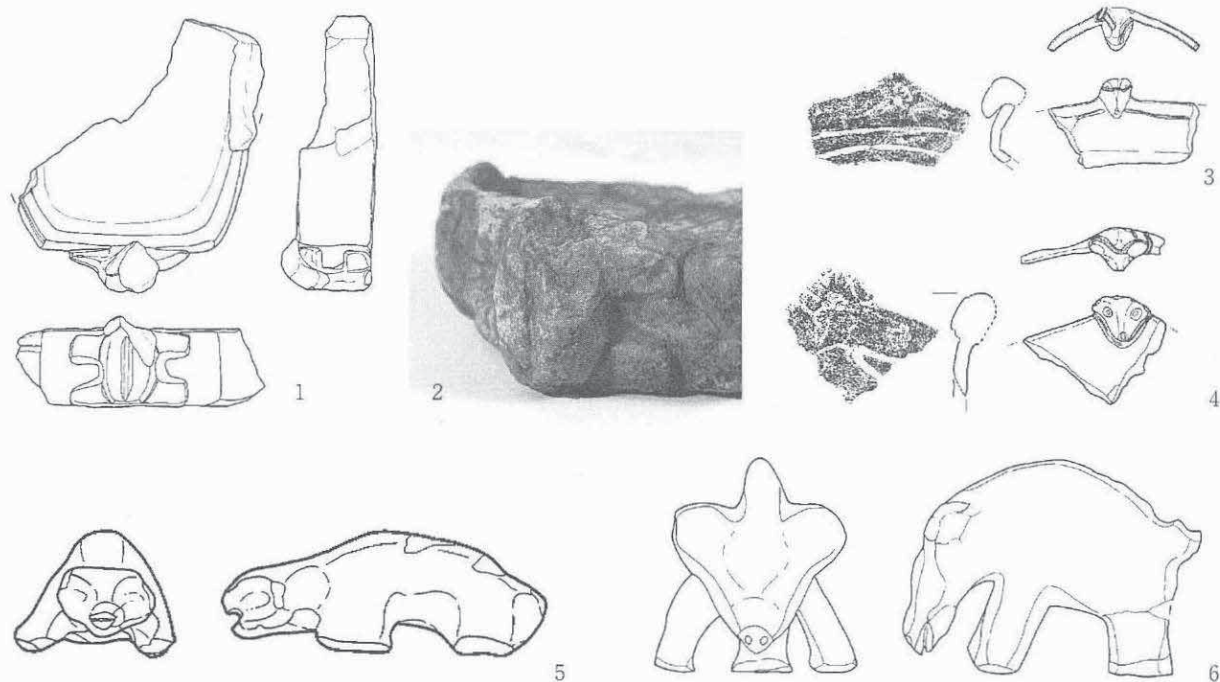
以上の中でも、まずクマ表現のついた動物付石皿2例に注目したい。

三内丸山(6)遺跡で出土した動物付石皿(第1図1)は、石皿の側面に頭部欠損のクマが、側面に対して縦方向に陽刻されているもので、胴体には縦に1条の沈線が刻まれている。胴体と両手足の間には沈線

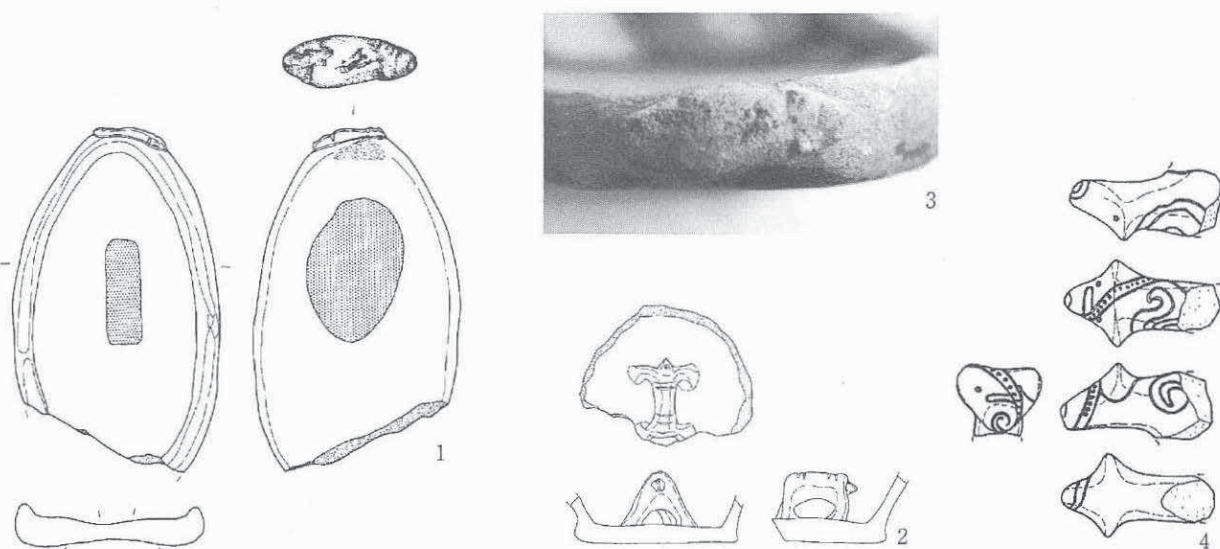
が施され、両手足と胴体を明確に分けている(第1図2)。このことから、クマが胴体から横方向に手足を伸ばした姿を表現していると考えられる。

小牧野遺跡出土例では、同じく石皿の側面に、横方向に動物表現が付いている(第2図1)。一見すると何の動物か不明であるが、耳の表現と胴部の大きさからクマであると考えられる(第2図2)。三内丸山(6)遺跡の出土例とは異なり、両手両足の表現がない。

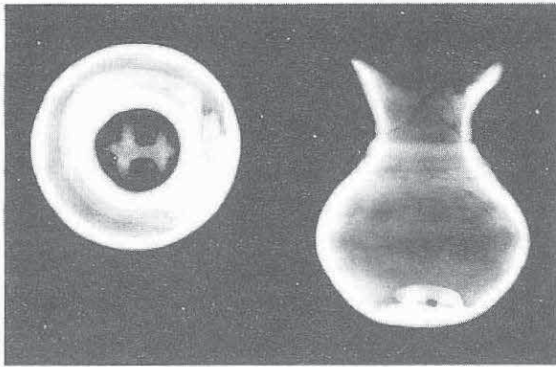
これらの資料は石皿の側面に付いているため、他



第1図 三内丸山(6)遺跡(1:石皿、2:1の写真、3・4:動物突起、5・6土製品)※縮尺不同



第2図 小牧野遺跡(1:石皿、2:1の写真、3:動物形内蔵土器、4:土製品)※縮尺不同



第3図 近野遺跡



第4図 水木沢遺跡



第5図 古街道長根遺跡

の動物形土製品とは違い、どのような視点で描写しているのか判断しやすく、両者とも俯瞰視点でクマが表現されていると考えられる。また、両手両足の表現の有無などの特徴から、描写視点を俯瞰と想定するならば、表現されているクマの姿勢は三内丸山(6)遺跡が伏せている状態を、小牧野遺跡は立っている状態を描いていると考えられる。

三内丸山(6)遺跡の土製品(第1図6)や古街道長根遺跡の土器口縁部付近に付いている土製品(第5図)は、立っている姿を表現している。

両手両足を表現し、伏せている状態と考えられる遺物には、動物形土製品内蔵土器の底部内面にある土製品がある。

この動物形土製品内蔵土器の完形品は近野遺跡で出土しており、壺形土器の底部内面に動物形土製品が貼り付けられている。通常は底部破片か、動物形土製品の部位のみ出土する例が多く、動物の表現は粗く、顔面・胴部の表現から動物種名を判断することは難しい(第2図3)。多くの場合は四足の動物と想定される。

完形品を口から覗くと、動物形は両手足を広げるような姿勢で貼り付けられている。破片資料も同様であるが、横から見ると胴部と底部内面が密着していない例が多い。動物形土製品内蔵土器の完形品のX線写真では、胴体部は完全には貼りついていない(第3図:白鳥2003)。

しかし、完形品から考えると、壺の内部を側面からみることはできない。土器の製作者の意図は上からの覗くことを想定して、作成していると考えられる。この場合、その姿勢は両手両足を横方向に伸ばしており、三内丸山(6)遺跡の石皿のようにクマを表現している可能性がある⁽¹⁾。

他に、三内丸山(6)遺跡出土のクマ付き土器があるが、手足の表現がないことから、どちらを表現しているのか判断が難しい(第1図3・4)。

これらの遺物の時期は後期前葉の十腰内式期に相当し、クマ表現には立像と伏せ像の両方があることが確認できる。この視点を参考に時期を広げて、その系譜を見てみたい。

5. 狩猟文土器の文様

三内丸山(6)遺跡の動物付石皿の表現と同じように両手両足を広げた状態を表現していると考えられるものに、狩猟文土器の動物文がある。

狩猟文土器は東北地方北部の後期初頭を中心に出土する土器で、その文様の特異性から多くの検討がなされ、近年では斎野裕彦の論考がある(斎野2006・2007)。現在、狩猟文土器の最古の事例は福島県和台遺跡から出土しており、狩猟文土器出土の集中域である東北地方北部から離れた場所で出土している(西戸・大槻ほか2003)。

文様は樹木文・弓矢文・動物文・人体文・抽象文が土器に施されている。青森県では人体文以外の要素の樹木文・弓矢文・動物文・抽象文で展開する例が中心である。各要素の文様を詳細にみると、矢先の表現、動物文の頭部表現、樹木文の枝葉の上下方向などの描き方に違いがみられる。

これらの文様要素の展開から縄文時代の狩りの風景を描いていると説明される場合があり、動物文はイノシシやクマと想定されている。

狩猟文土器の集成は多くあり、その中でも青森県内出土の動物文を抽出すると、稲山遺跡4例(第6図)、山野峠遺跡(第7図)、西山遺跡1例(第8図)、葦窪遺跡1例(第9図)がある。

近年の発掘によって天当平（1）遺跡で出土し、國學院大學學術資料館考古学資料館の所蔵資料の中にも1例ある⁽²⁾。

動物文は口や目鼻を表現していると思われるもの、縦方向の区画隆線と一体化するものなど、詳細な表現方法の違いがあるものの、ほとんどの動物文は両手足を横方向に広げたような状態の表現が隆線で施されている。また、西山遺跡からは明確にシカを表現した動物文が出土している（第8図）。

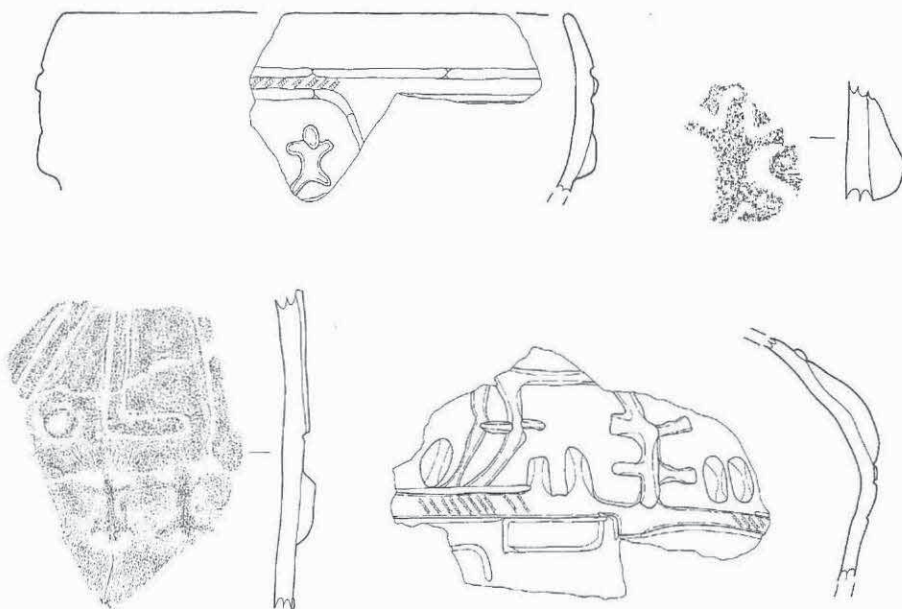
この動物文は、何の動物を描写しているのか想定し難いが、西山遺跡の明確なシカ表現を考えると、動物文は抽象的な動物ではなく、なんらかの動物を表現していることを示している。

先述したように、動物文はイノシシか、クマを想

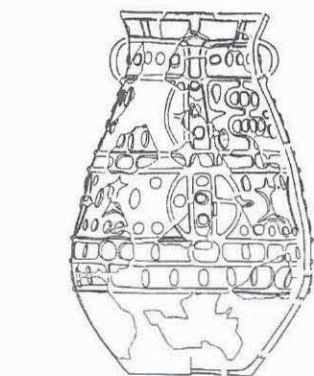
定する場合があるが、三内丸山（6）遺跡出土の動物付石皿から得た両手両足を広げたクマ表現という視点や、イノシシではこのような両手両足を広げたような姿勢をとるとは考えにくいことから、クマを表現していると判断できる⁽³⁾。

このようなクマ表現は前項で述べたように、伏せている状態であるとするならば、西山遺跡の動物文のシカ表現も、立っている姿を横から見て、描いているのではなく、倒れている状態を俯瞰視点から表現している可能性がある。

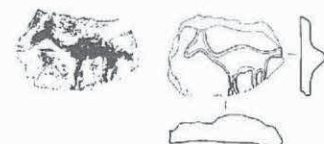
以上のことから、狩猟文土器の、手足を横に広げた動物文を俯瞰視点で描かれておりクマ表現である捉えて、次に遺跡から出土するクマ表現の遺物を各時期で整理し、その意味を考えてみる。



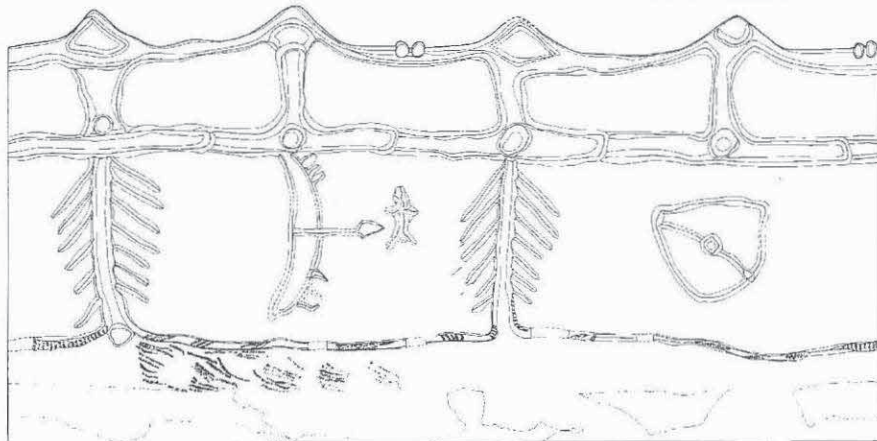
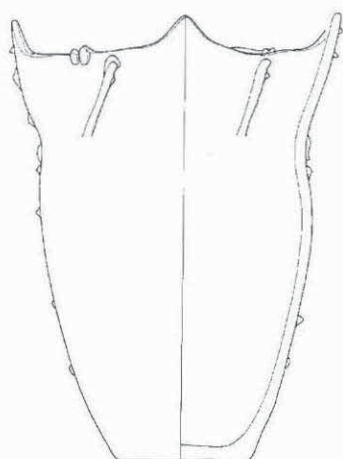
第6図 稲山遺跡の狩猟文土器（動物文）



第7図 山野峠遺跡の狩猟文土器



第8図 西山遺跡の狩猟文土器（シカの動物文）

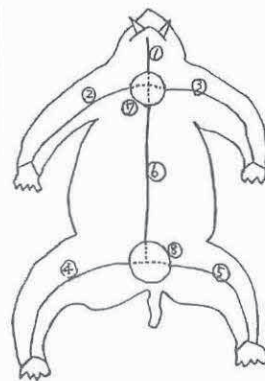


第9図 葦窪遺跡の狩猟文土器

* 縮尺不同



第10図 クマ祭りの様子



第11図 クマの皮剥ぎ（右：皮剥ぎの順序）

6. 祭祀の変化

縄文時代後期初頭には狩猟文土器の動物文（第6・7・9図）があり、次の段階の後期前葉では、土製品（第1図5・6）・動物付石皿（第1図1・第2図1）・口縁部にクマの顔が付いた土器（第1図3・4）がある。後期初頭は伏せている状態を表現し、その後の後期前葉では立っている状態を表現しているものが出現していると、まとめることができる。また、土器の文様から土製品・石皿などの表現される遺物の多様化も確認することができる。

では、クマ表現の遺物は何を意味しているかを、その姿勢から考察してみる。クマ表現の時期を越えて共通する表現は伏せている状態である。このような姿勢は通常、野生のクマがとる姿勢ではなく、生きた状態でこのような姿勢をとるか疑問である。

このような姿勢の状態はクマの死んだ状態であり、アイヌのクマ祭り（第10図）やクマの皮剥ぎ（第11図）などの姿勢に類似している。皮剥ぎにも技術的な側面も含めて、熊の頭を北にして、仰向けにし、解体の順番があるなどのなんらかの儀礼的な所作を伴っている（第11図：秋田県教育委員会1964）。三内丸山（6）遺跡出土の動物付石皿のクマ表現には胴体部の中心に刻みがあり、解体による傷を描いているとも考えられるが、腹部ではなく、背中に刻まれており、検討課題である。このようなクマの姿勢の特徴から、伏せている状態は死を表現しており、それは単なる狩猟によって捕獲されたということだけではなく、何らかの所作を伴って、姿勢を作られていると考えられ、祭祀における動物の姿勢を表現していると捉えられる。

従来、狩猟文土器は狩りの風景を狩猟儀礼として

描いていると述べられてきたが、動物文をこのように捉えるならば、狩猟後の儀礼を表現していると言える。

それに対して、後期前葉になると立っている姿が表現されていることから、生きている姿を表現していると想定でき、クマ表現の遺物の多様化とともに、新たな表現方法が加わったことがわかる。

先述したように、クマへの意識は縄文人が何らかの形で持っていたと考えられるから、その表現方法の違いや多様化は、祭祀行動の変化と把握できる。

これらの遺物の出土状況を見ても、狩猟文土器は稲山遺跡や葦窪遺跡などの遺構から出土する事例があるが、後期前葉のクマ表現の遺物は遺構外から出土することが多く、廃棄パターンに違いが見られる。あくまで、廃棄の段階であり、祭祀の道具としての差異ではないが、廃棄行為も祭祀行為の一部と考えるならば、その所作の違いとも考えられる。

このような祭祀の変化が起きている後期前葉の時期にはクマ表現の祭祀遺物以外にも、起こる現象がある。それが環状列石である。

日本列島的には、環状列石の成立は後期前葉に限られないが、青森県内ではクマ表現の遺物が出土している小牧野遺跡があり、この遺跡の環状列石は後期初頭から前葉を主体としている。このような祭祀空間の構築は場と祭祀との関係を想起させる。

筆者は以前、場の重要性という視点から、千葉県域を中心に、縄文時代中期後半から後期前葉までの埋葬姿勢、埋葬方法の変化と集落との相関関係について検討したことがある。埋葬姿勢の屈葬から伸展葬への変化、土坑墓の形状的な変化と集落の立地の変化に関係性がみられるというものである。

このような視点から場と祭祀との関係について、若干ながら私見を述べたい。

7. 場の重要性から見る祭祀の変化

この地域には有名な三内丸山遺跡があり、遺跡内には大形木柱列が検出されている。この大形木柱列はランドスケープ分析により、二至二分と関係していることが指摘され、このランドスケープの要因が集落の占地を決定した理由であると考えられている(太田原 2005)。その他に、継続的な積み重ねによって作られた盛土などがあり、土偶や小型土器などの祭祀的な遺物が多く出土し、祭祀行為をうかがわせる。このような行為は特別な場に特別な意味を与えるものであり(宮尾 1999)、場の重要性を高めている。

三内丸山遺跡は中期中葉が最も栄えて、その後は徐々に終焉していく。後期初頭や後期前葉の土器も出土しているが、遺構は土坑が1基確認されているのみである(成田 2005)。三内丸山遺跡の終焉原因は気候の寒冷化によるクリ林の崩壊、土偶を介した集落間のリレーションの崩壊(成田 2005)、集落の集中居住から分散居住へ(山田 2005)などが想定されている。

三内丸山遺跡の周辺遺跡をみると三内丸山(5)遺跡で中期末葉の住居跡が、三内丸山(6)遺跡で後期前葉に遺構が増加するなど、別の場所に徐々に推移していく過程が想定できる。地域が異なるが、千葉県印旛沼周辺でも同様な傾向が見受けられる。印旛沼周辺の縄文時代中期末葉から後期初頭の集落は中期後半集落の近辺に散在する傾向があり(高橋・林田ほか 2003)、非居住域への分散居住と捉えられている(加納 2000)。また後期前葉は中期末葉から後期初頭とは異なる場所に集落を形成する傾向があるとの指摘もされている。

小林達雄はマツリの装置として、マツリを挙げる空間である場とマツリに用いる道具の2つを挙げ、環状列石や巨木柱列、環状土手などの記念物をマツリの空間設定の典型と述べた(小林 2006)。

つまり、三内丸山遺跡の巨木柱列や盛土から小牧野遺跡の環状列石への祭祀の場の移動は、もう一つの装置である道具の変化を生じさせる原因となつたのではないか、新たな場所での祭祀の場の構築は新たな祭祀を発生させる要因であると考えることがで

きる。

8. まとめと考察

動物を表現した遺物を当時作製し、使用した縄文人の視点や表現された動物の姿勢を考慮して、クマ表現を抽出し、縄文時代後期前葉のクマ表現には、立っている状態と伏せている状態があることを確認した。また、後期初頭の狩猟文土器の動物文についても、両手両足を広げている状態であることから、後期前葉の伏せている状態との類似性からクマの可能性が高いと判断した。

伏せている状態のクマは民俗学的な事例との比較から死後の祭祀行為におけるクマの姿を描いていると考えられ、クマへの意識を前提とするとクマ表現の遺物は祭祀で使用された、もしくは、狩猟文土器の文様展開から、その風景を描いている可能性があることを確認した。

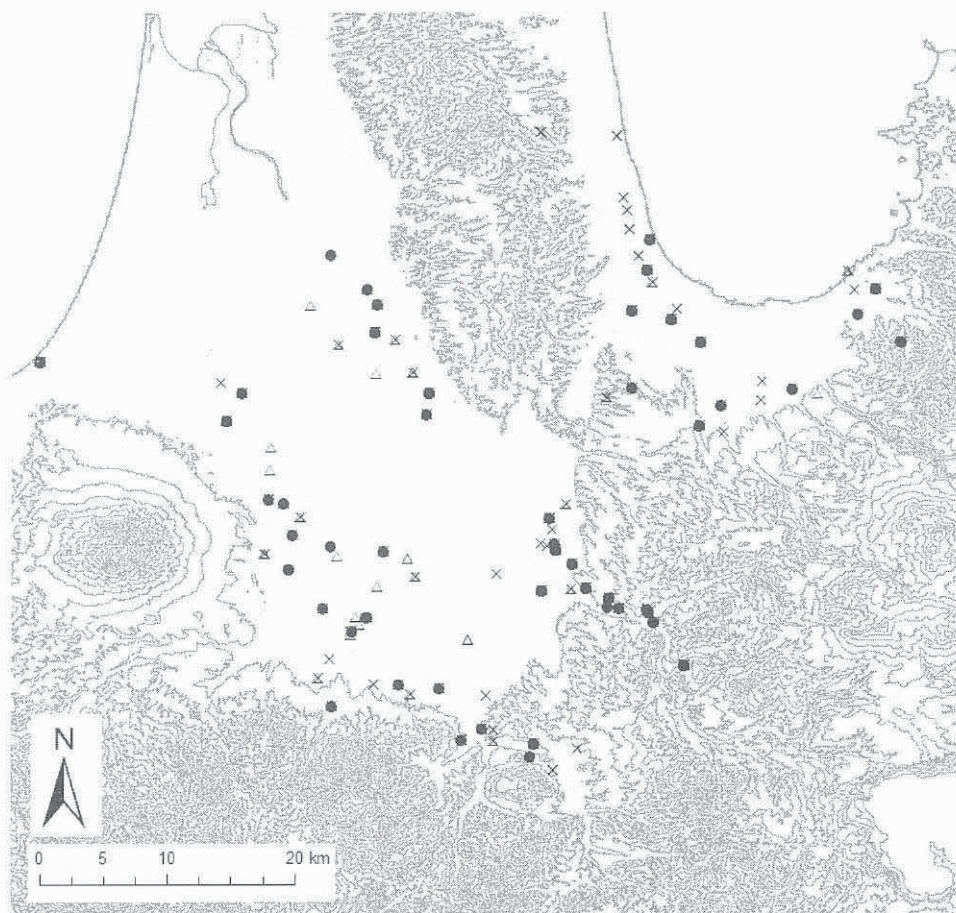
立っている表現を生の状態と判断するならば、後期初頭の死の表現から後期前葉には、生の表現が加わるという表現方法の違いが見られる。

このような相違は遺構内外の出土状況や表現される遺物の多様化などの祭祀行為の変化と考えられ、その変化の要因を場の重要性から述べた。

場の重要性における祭祀の変化との関係についてはさらに検討が必要である。場と祭祀の問題は神奈備信仰や社殿の創建など、縄文時代という範囲を超えた祭祀考古学共通の課題であり、現在は、集落時期と祭祀との関係を検討するべく、地理情報システム(GIS: Geographic Information Systems)を利用した分析を試みている(第12図)。今後は、データを集成し、データ数を増加し、解析していく予定である。地理情報システムを使用して、集落の立地を検討する場合、その生態的な側面や移動コストなどの分析が行なわれているが、場の重要性という視点から祭祀的な要素を加えて、検討することも重要であると考えている。

先述したように、この時期の集落移動は三内丸山遺跡とその後の時期の周辺の遺跡のように、短距離の移動であり、生態的・環境的に大きく異なる場所に移動しておらず、現在のところ中期と後期の集落立地の傾向に、大きな違いがみうけられない。

また、このような集落移動は新たな土地の開拓と



第 12 図 青森県の縄文時代遺跡の分布図（上段：東部域、下段：西部域）
（中期：●、後期：×、晩期▲）

の関係も考えてみる必要がある。クマは行動圏では特定のナワバリを作らないとされており、現在の熊を怖がる共通認識は奥山の熊の生息場所まで人が入り込んだことにより、熊と遭遇するようになったためとの指摘がある（赤羽 2008）。同様に考えるならば、集落移動による人の移動とクマ表現の遺物の出現・増加とに関係があっても、良いのではないかと考える。

つまりは、マツリの装置である祭祀の場と道具との変化の関係性に、祭祀の場・集落の移動によって生じたクマとの遭遇増加、それによるクマへの意識の再認識とモノへの表現という過程を想定することができると思われる。

9. おわりに

縄文時代後期の第二の道具の中から、クマ形土製品を含めたクマ表現の遺物に注目し、検討を行なった。クマ表現の遺物から祭祀の変化の要因まで論を拡大させて述べてきたが、このような違いが他の第二の道具から見られるのか、検討しなければならないと考える。

今後は本稿で確立した視点をもとに、他の第二の道具を微細に観察するとともに、生業面などを考慮し、GISなどを活用して、祭祀考古学の方法論・分析方法の確立を目指していく。

なお、本稿は伝統文化リサーチセンターで調査した実見資料およびデータベースを活用し、2008年2月29日に行なわれた「祭祀遺跡に見るモノと心平成19年度フォーラム」で発表した「東北地方北部：平成19年度の活動報告および来年度の研究計画」を下に執筆したものである。末筆ではあるが、協力者の方々・協力して頂いた関係諸機関に謝意を表する。

註

- (1) 土器の製作過程を考えると、製作途中には立っている状態を、完成時にはうつ伏せの状態で見えるように表現されているのかもしれない。また破片資料が多いことから、意図的な破壊も考えられ、その反対の意図も想定できる。
- (2) 國學院大學所蔵の資料については狩猟文土器の研究結果と併せて、公表する予定である。
- (3) 春成秀爾はクマとイノシシの土偶の比較から、狩猟文土器の動物文をクマとしている（春成 1995）

参考文献

- 赤羽正春 2008『熊』ものと人間の文化史 144、法政大学出版局（東京）
- 秋田県教育委員会 1964『狩猟習俗調査報告書（マタギ習俗・鷹狩り習俗）』秋田県埋蔵文化財調査報告書第4集、秋田県教育委員会（秋田）
- 伊藤慎二 2006「VI. ロシア極東の新石器文化と北海道」『東アジアにおける新石器文化と日本』Ⅲ（21COE 考古学シリーズ 6）：59-90 頁、國學院大學 21 世紀 COE プログラム研究センター（東京）
- 宇田川洋 1989「動物意匠遺物とアイヌの動物信仰」、『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第8号：1-42 頁、東京大学文学部考古学研究室（東京）
- 江坂輝彌 1960「動物形土製品」、『土偶』239-254 頁、校倉書房（東京）
- 大田区郷土博物館 2003『特別展「動物と考古学」図録』、大田区（東京）
- 太田原潤 2005「三内丸山遺跡の大形木柱列と二至二分」、『縄文ランドスケープ』241-271 頁、アム・プロモーション（東京）
- 金子昭彦 2004「東北地方の動物形土製品」『考古学ジャーナル』No. 515：14-17 頁、ニューサイエンス社（東京）
- 加納実 2000「集落的居住の崩壊と再編成」、『先史考古学論集』第9集：63-104 頁、安齋正人（千葉）
- 小林達雄 2006「縄文のマツリ」、『東アジア世界における日本基層文化の考古学的解明』（21COE 考古学シリーズ 7）：125-131 頁、國學院大學 21 世紀 COE プログラム研究センター（東京）
- 斎野裕彦 2006「狩猟文土器と人体文」、『原始絵画の研究論考編』233-271 頁、六一書房（東京）
- 斎野裕彦 2007「狩猟文土器と人体文」、『第4回土偶研究会「環状列石 土偶と絵画」』3-8 頁、土偶研究会（青森）
- 佐原真 1993「多視点画から一視点画へ」、『論苑考古学』365-414 頁、天山舎（東京）
- 設楽博巳 2006「日本原始絵画研究の歴史と課題」、『原始絵画の研究論考編』15-37 頁、六一書房（東京）
- 志村哲 2002「熊形埴輪」、『動物考古学』第18号：111-116 頁、動物考古学研究会（千葉）
- 白鳥文雄 2003「エックス線透過撮影の各種遺物への利用」、『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第8号：21-26 頁、青森県埋蔵文化財調査センター（青森）
- 高橋誠・林田利之・小林園子 2001「縄文集落の領域と「縄文流通網」の継承」、『財団法人印旛郡市文化財センター研究紀要』2：73-109 頁、財団法人印旛郡市文化財センター（千葉）
- 直良信夫 1998「熊と古代人〔付記：春成秀爾〕」、『動物考古学』第11号：109-144 頁、動物考古学研究会（千葉）
- 成田滋彦 2005「三内丸山遺跡の終焉」、『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第10号：27-34 頁、青森県埋蔵文化財調査センター（青森）
- 西戸純一・大槻巖・新井達哉ほか 2003『和台遺跡—第1次～第4次調査報告—』飯野町教育委員会（福島）
- 春成秀爾 1995「熊祭りの起源」、『国立歴史民俗博物館研究報告』第60号：57-99 頁、国立歴史民俗博物館（千葉）

福田友之 1998「青森県域出土の先史動・植物意匠遺物」、『東北民俗学研究』第6号：155-174頁、東北学院大学民俗学OB会（宮城）

松井章 2003「環境考古学3 大型哺乳類骨格図譜」、『埋蔵文化財ニュース』113、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター（奈良）

宮尾亨 1999「自然の中に取り込んだ人工空間としての記念物」、『最新縄文学の世界』61-73頁、朝日新聞社（東京）

女鹿潤哉 2000「クマ祭儀」の行方、『北海道考古学』第36集：47-64頁、北海道考古学会（北海道）

山田昌久 2005「縄紋集落の大きさとしくみ」、『縄文文化を掘る』79-102頁、日本放送出版協会（東京）

挿図文献

第1図：三内丸山（6）遺跡：青森県埋蔵文化財調査センター 2002『三内丸山（6）遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第327集、85・132・133・247・296頁、青森県教育委員会（青森）

第2図：小牧野遺跡：小牧野遺跡発掘調査会・青森市教育委員会 1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』青森市埋蔵文化財調査報告書第30集：174・182頁、青森市教育委員会（青森）
青森市史編纂委員会 2006『新青森市史資料編1 考古』254頁、青森市（青森）

第3図：白鳥文雄 2003「エックス線透過撮影の各種遺物への利用」、『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』第8号：21-26頁、青森県埋蔵文化財調査センター（青森）

第4図：水木沢遺跡：青森県教育委員会 1976『水木沢遺

跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財町長報告書第34集：96頁、青森県教育委員会（青森）

第5図：鈴木克彦 1986『日本の古代遺跡29 青森』94頁、保育社（大阪）

第6図：青森市教育委員会 2001『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』青森市埋蔵文化財調査報告書第56集：90頁、青森市教育委員会（青森）

青森市教育委員会 2002『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森市埋蔵文化財調査報告書第62集：450頁、青森市教育委員会（青森）

青森市教育委員会 2003『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青森市埋蔵文化財調査報告書第66集、525頁、青森市教育委員会（青森）

第7図：葛西励 2002『再葬土器棺墓の研究』134頁、「再葬土器棺墓の研究」刊行会（青森）

第8図：西山遺跡：青森県埋蔵文化財調査センター 1991『雷遺跡・西山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第136集：89頁、青森県教育委員会（青森）

第9図：葦窪遺跡：青森県埋蔵文化財調査センター 1983『葦窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第84集：106・107頁、青森県埋蔵文化財調査センター（青森）

第10図：更科源蔵 1955『熊祭』北方文化写真シリーズ、楡書房

第11図：更科源蔵 1955『熊祭』北方文化写真シリーズ、楡書房

秋田県教育委員会 1964『狩猟習俗調査報告書（マタギ習俗・鷹狩り習俗）』秋田県埋蔵文化財調査報告書第4集、秋田県教育委員会（秋田）